

## 2208 離島覚書（鹿児島県・請島）



令和4年4月11日

### 黒豚の出荷

町営定期船「せとなみ」は8時に与路島を出発した。請島の池地を経て、8時45分に請島のもう一つの集落である請阿室に着いた。

請阿室の栈橋には、黒豚を乗せたトラックが待機していた。ケージの中には6～7頭の黒豚がひしめいていた。ケージはすぐにクレーンで吊り上げられ、船に載せられた。偶然、豚の出荷作業に出くわすことになったのである。

請島ではもともと各家で豚を飼っていた。集落の中にはコンクリート製の豚小屋の跡がたくさん残されている。この小さな島社会でも臭気が公害として問題となり、1980（昭和55）年に集落から離れた山のなかに養豚団地を整備して、こちらに移転したのだった。当初は7経営体ほどがこの団地で養豚を営んでいたが、次第に経営体の廃業が続き、今ではこの日出荷した1経営体（山下マサルさん）のみとなっている。ただし、島で会った後述するおばあさんによると、山下さんは高齢で、2年後にはやめる予定だという。

港には「民宿・とやま」のご主人が迎えに来ていた。というよりも彼は「せとなみ」のロープ取りと切符の販売を委託されているので、毎日船が着くたびに港に来ているのだ。

民宿の軽自動車に同乗し、数分で集落の西はずれにある民宿に着いた。

請島は面積 13.34 km<sup>2</sup>、周囲 24.8 km の東西に細長い島で、池地と請阿室の2つの集落で構成される。奄美群島の中では与路島の次に小さな有人離島である。

与路島と同様、もともとは大島郡鎮西村に属していたが、1956（昭和31）年の町村合併により現在は瀬戸内町に属している。2020年国勢調査時の人口は82人（56戸）であった。2022年5月末時点での住民基本台帳上の人口は89人、世帯数は61戸となっている。

請島の人口のピークは1927（昭和2）年の1,496人。この時の地区別の人口は請阿室が689人、池地が807人であった。その後、人口は減少の一途を辿り、現在はピーク時の1/10

以下になってしまった。なお池地と請阿室地区の人口比は今でもほぼ1：1である。



黒豚が収容されているケージ（左）、定期船に黒豚を積み込む（右）

## 請阿室

部屋に荷物を置き、早速、請阿室の集落内を散策する。

島の玄関口である請島港は砂浜を埋め立てて造られた地方港湾である。中央に突堤が伸び、沖からみて右手が埋め立てた造成用地、左手に元の砂浜が残る。ここは海水浴場になるようで、船客待合所の裏にシャワー施設が整備されている。ただ海水浴客は誰もいなかった。

港内には船外機が1隻だけ係留され、また船外機4隻が陸置きされていたが、実際に使われているのは1隻だけのようで、漁業は全くといってよいほど低調である。ちなみに港に係留されていたのは「民宿とやま」の船だ。たまに釣りに出る人が3人いるので、陸置きされていた船外機はその人たちのものらしい。集落でお会いした川端文磨さんによると、請阿室には漁師が2人いたが、酒を飲みすぎて早く亡くなったという。

与路島と同様、請島でも漁業は発達しなかったのだが、その理由は、奄美諸島の島民の多くは必要な魚介類を自ら獲ることからマーケットが存在せず、しかも大型の漁船を造るのには多額の資金を必要としたためだ。

ちょうど「せとうち丸」という海上タクシーが港に入り、4人が上陸した。

港と砂浜の背後には防潮堤が造られている。県営治山施設で1982（昭和57）年度に竣工した。防波堤の背後にはモクマオウの木が植えられ、さらにその後にアダンやアコウなどの在来植生がグリーンベルトを形成している。

砂丘で形成された堤の背後に集落が碁盤の目のように整然と区画されている。というのも1881（明治14）年に奄美地方で最初の区画整理が行われたのがこの請阿室なのだ。そして各家はブロック塀で仕切られている。川端さんによると、30年ほど前に古くからあったサンゴ石の塀を取り壊してコンクリートブロックに作り替えたのだそうだ。ハブがよく出たからだ。つまりハブの棲み家になっていたサンゴ石の塀をより安全なコンクリートブロック塀に換えたのである。隣の与路島では一度ブロック塀に換えたものの、再び文化遺産の観点から元に戻し、安全よりも景観を重視した。このように隣り合わせの島同士で対応が異なっている。

請島は8つの区に分かれている。池地地区が1～4区、請阿室地区が5～8区だ。請阿室地区の場合は集落の中央を流れる川を挟んで、西側が5区、東側が6～8区。民宿は5区の

はずれに位置する。請阿室の集落は現在 28 戸、このうち夫婦世帯は 8 戸というから、20 戸は単身世帯ということになる。したがって人口は 37 人だろう。ちなみに 5 区の夫婦世帯は「民宿とやま」の渡山夫妻と姉夫婦の 2 戸だけだ。集落内の大半は空き家で、すでに朽ち果てた廃屋も見られる。

集落の背後には 3 方向に谷戸があり、それに沿って農地が広がるが、特に中央の谷戸地の面積が最も広い。



碁盤の目のような請阿室の集落（左）、ブロック塀に作り替えられた敷地境界（右）

## 公民館

集落のほぼ中心地に広場があり、請阿室の公民館が置かれている。公民館の前には例によって土俵があったが、屋根はなくむき出しになっていた。風雨に晒されるためビニールシートを敷き、その上に古タイヤを並べてシートが風で飛ばされないようにしているのだが、シートはいたるところで綻び、土俵はもう何年も使われた様子は見られない。

最初にこの土地を見た時は、旧小学校の土地だったのではないかと想像したが、集落で会った人に聞いたところ、もとは池だったという。池の水深は最も深いところで 1.5mほどあり、昔は琉球のマーラン船がここまで入って来たと伝えられている。1972（昭和 47）年にこの池を埋め立てて広場が生まれ、公民館が新たに建てられた。広場の一角に、山下富定・山下亀太郎翁記念碑、仲間愛熊翁頌徳碑、忠魂碑が並んで建っていた。

山下富定・山下亀太郎翁記念碑は 1932（昭和 7）年に請阿室の青年団が建てたものだ。山下富定と亀太郎は同じ苗字だが血縁関係はなく、年齢も富定の方が 20 歳ほど上のような。富定は島に寺子屋をつくり、私費で鹿児島から教師を呼び、島の教育と人材づくりに貢献するとともに集落内の道路を直線化し、区画整理を断行した。一方亀太郎は島に青年団を組織し教育に力を入れたらしい。

仲間愛熊は沖大東島のリン鉱石を開発したラサ工業に勤務し、郷土出身者の雇用をはかるとともに晩年は私財を島に寄付した功績が記されていた。忠魂碑には請阿室出身の戦死者 25 人の氏名が刻まれていた。与路島の戦死者数より少ないが、小さな島でこれだけの若者が戦死したのは痛恨の極みであったに違いない。両方の石碑は請阿室部落会が建てたものである。

同じ敷地内に下部がレンガ積み、上部がログ組のリサイクル施設が置かれていた。与路島にあったものと同じデザインで、同じく瀬戸内町が整備したものである。

広場の海側に請阿室集落の墓地がある。入口には「共同墓地」と書かれており、「昭和 47 年 11 月・壮年団之建」とあることから、おそらく池を埋め立て造成した折につくられたものであろう。ただ町健次郎さんの論文には「墓地が移動された話はなく、古くから現在地にあるという」と書いてあるので、時を同じくして当地で再整備したのかもしれない。



集落中央部の広場と公民館（左）、山下両氏と仲間氏の石碑（右）

### 製糖業からニンニク栽培へ

集落背後の農地に向かう途中でおばあさんに会った。82 歳になるという。おばあさんと立ち話をする。請阿室の家はどこも子供が 4～5 人いて、賑やかだったそうで、ひっそりとして現在を嘆いておられた。

島の重要な現金収入源はサトウキビであった。各家は細々と黒糖に加工していたが、1937（昭和 12）年に共同製糖工場ができ、戦後は古仁屋に製糖工場がでたのでキビを船に積んで出荷した。しかし 8 年でこの製糖工場は閉鎖となり、再び島内での小規模加工に戻る。当時、島には黒糖の加工場が 3 ヶ所あったそうだ。ただ 1950 年ごろからサトウキビの生産は徐々に減少していき、おばあさんが 30 歳のころ、つまり 50 年ほど前（1970 年ごろ）にはサトウキビ生産は終焉したという。

サトウキビに代わる換金作物はニンニクだった。1967 年ごろから農協の勧めで、ニンニクの植え付けが始まった。9 月に入ると鱗片を植え、翌年 3 月ごろに収穫、収穫したニンニクは島で加工した。塩漬けの他に、酢漬け、砂糖漬けなどがつくられた。当時、島には 3 ヶ所に加工場があった。大里さん、竹山さん、森川さんの 3 人である。島の人々がつくったニンニクを原料に 3 軒で加工して島外に販売したのである。しかし、過疎と高齢化の進行でこのニンニク栽培も衰退していく。

なお、大里さんの大里食品は今でも 1 軒だけ島に残り、ニンニクの加工品をつくっている。竹山さん（竹山食品）と森川さんは古仁屋に出て、ニンニク加工を続けているそうだ。

ニンニクの他にも落花生が換金作物だった。落花生は古仁屋に出荷したそうで、町の人が酒のつまみに買ってくれたという。

与路島に較べると、請阿室ではまだ農業はそれなりに行われていて、付近には落花生や西瓜を栽培する畑が見られた。ニンニクは手間があまりかからないし、イノシシも食べないので今でもいくらか作られていると思われるが、植え付けが 9 月なので確認できなかった。

裏手に請阿室商店があり、ここでニンニクの加工品が売られているそうだが、開店は 14

時からなので、訪ねることはできなかった。

続いて集落を東に進むと上述した川端文麿さん（87 歳）に会った。木陰に腰かけて話を聞く。父親は 93 歳、母親は 102 歳まで生きたというから長寿の家系のように本人も至って元気だ。小学校は池地まで 9 年間歩いて通ったそうで、当時の同級生は 48 人だった。

目の前のブロック塀に囲まれた立派な家に住む。ただ近所で人が住んでいるのは 4 人だけで周りは空き家ばかりだという。家の屋根はトタン葺きだが、以前は茅葺だったそうで、ススキを刈り、干してから使った。

子供は男 2 人、女 3 人で、男 2 人は瀬戸内町役場に勤めており、定年後も島に戻る予定はないという。長女は石垣島に住む。



落花生の畑（左）、西瓜の畑（右）

## ソテツと農地

請阿室の集落の背後は 3 つの谷があり、この一帯はかなり広い農地が開墾されていた。池があっただけだから水は多く、島には珍しく水田がかなりあったらしい。基本的に米は自給できた。1956（昭和 31）年の鎮西村要覧によると、請阿室の田は 92 反、畑は 344 反で、田の面積は与路、諸鈍（加計呂麻島）に次いで多く、また畑は与路に次いで多かった。

水田は集落に近いところにあり、畑は山の斜面を切り開いた段々畑と焼畑であった。与路島と同様にサトウキビ、甘藷、小麦の輪作が行われていたようだ。これらの畑は集落からかなり離れていたため「ヤドリ」と称する農作業用の小屋が各所に建てられていたらしい。

焼畑は請島では「アラジバテ」と呼ばれ、1955（昭和 30）年ごろまで行われていた。焼畑は、個人の場合と「結」で助け合って行うものに分かれた。焼畑では粟と小麦が主に作られて、またサツマイモも植えたようだ。しかし現在は段々畑も焼畑の跡もほとんど確認できないほどに山林が復活している。

集落を散策してから背後の農地を見に行った。昔、田んぼだったところは土地改良によって畑地にかわり、用水路も整備されている。しかし、畑地の大部分は牧草地であった。そして牧草地の境界にはソテツが植えられている。またソテツの畑が残っている。ソテツの実には澱粉質に富み、救荒作物として重要であったから、かなりの規模のソテツ畑が広がっていた。今でも畑が残っているのは、ソテツの実はそれなりに需要があるようで、請阿室地区では 3 人が栽培し、出荷しているという。ちなみに販売価格は 1,000 円/kg ほどらしい。



集落背後の農地を流れる水路（左）、ソテツの実（まだ赤く熟していない）（右）

### 電照菊栽培の蹉跌

うだるような暑さと湿気で、Tシャツはぐしょぬれである。畑は午後から車でじっくりと見学することにして、民宿に戻ることにした。

宿の近くに農業用のビニールハウスが放置されていた。また北側の谷戸沿いの農地にもハウスの残骸がある。ビニールは破れ、雑草が伸び放題になっている。

民宿のご主人の話では、このハウスでは 1998 年ごろから電照菊を栽培していたそうだ。サトウキビがダメになったことで、養豚、ニンニク、落花生など農業の多様化の一環として進められたのである。しかし、すでに伊江島などを中心に沖縄県が電照菊の主産地形成をしており、冬場の国内の菊市場は沖縄県が占めていた。請島のような後発の弱小産地が沖縄の大産地に対抗できず、結局、産地形成には至らなかったのが原因のようだ。

ハウスではこのほかにメロン、ウリ、トマトなどが作られたこともあったが、何れも産地化するには至らなかったのである。

11 時 40 分に「民宿とやま」に戻った。民宿は商店も兼ねているので、アイスクリームを購入して食べ、部屋のクーラーを効かせて、シャツを着替え、休憩する。飲食店のない島の民宿は 1 泊 3 食付きなので、昼食が用意されていた。握り飯とソーメンチャンプル、ナーベラー（へちま）の味噌炒め、トコブシとサザエの酢の物であった。チャンプルの麺は太かったので冷や麦といった方が正しいだろう。具に小さなイリコが入っていた。チャンプルといい、ナーベラーといい、請島は琉球の食文化圏にある。なお握り飯は食べず。



放置された農業用ハウス（左）、草に覆われたビニールハウスの残骸（右）

## きゅらじま神社

隣の池地の集落までは約3kmの道のりなので歩いて往復することは可能だが、標高100mほどの峠を越えなければならず、しかもこの暑さでは途中で倒れかねない。民宿にお願いして車を貸してもらった。12時30分ごろに、民宿の軽自動車に乗り、隣の集落である池地に向かう。車のクーラーはやや性能が悪いが、車に乗っている間は猛暑を避けられる。

峠あたりに請阿室の集落を一望できるきゅらじま神社があった。この神社は大阪出身で鳥越電設社長の中本守氏が集落に神社がないことから、2003（平成15）年7月に建立したものだという。もともと琉球文化圏にあった請島はノロの影響が強く、神社ではなく、「ウガミヤマ」という聖地があった。この社長はノロのことはよく知らず何か誤解していたと思われる。ただノロ祭祀は大正時代に入ったころにこの請島から消えており、加計呂麻島や与路島に比べても早かったことが島外者によって建てられた神社が受け入れられた背景として考えられる。

この高台から請阿室の集落が一望でき、写真を撮った。



きゅらじま神社の鳥居と社殿

## 池地

峠を下った先が池地の集落である。比較的開かれた湾を抱え、標高数百mの山に囲まれた平坦部に集落が形成されている。

湾の中央あたりに200mほどの長い突堤が伸び、その先端に「せとなみ」が発着する。突堤の西側は船溜まりになっていて、海上タクシーらしき船と船外機2隻が係留されていた。また斜路には4隻の船外機が陸揚げされていた。請阿室に較べるとわずかだが船は多い。この港は地方港湾の請島港池地地区で、漁港ではない。

集落の背後にはもともと農地が広がっていたが、現在はすっかり荒れ果てている。まがりなりにも農地を牧草地として維持している請阿室地区とは対照的だ。かつての農地はネムの木ですっかり覆われていた。ネムの木は植生遷移におけるパイオニア種で、5年も経てば山林に戻ってしまい、昔の人々の営為は忘れられてしまうだろう。

請阿室で聞いた話では、池地と請阿室では気質がかなり異なり、両地区で対抗意識があったようだ。請阿室は農業が中心で農地を大切にしたいのに対し、池地は相対的に漁業が盛んで農業にあまり力が入らなかった。請阿室の女性は働き者だったので「嫁は請阿室からもらえ」といわれていたそうだ。与路、請阿室、池地の3集落は通婚関係にあったが、お互いの出身者の性格として、請阿室の食い倒れ、池地の着倒れ、与路の飲み倒れ、といわれていたと町は記している。

集落内を流れる小さな河川の河口部に郵便局があった。郵便物を配達するから島内の世帯数は当然把握しているはずなので局内に入って聞くことにする。郵便局には2人の女性職員がいた。若い方の女性は母親の実家が請島だったことが縁で郵便局に勤めていると言っていた。池地地区の世帯数は先生の家を含めて34戸、単身者が多いので、人口は40数名

とのことである。局は請阿室地区も所掌しており、請島全体の人口は 80～90 人だという。局の脇では除草目的でヤギが飼われていた。

池地の集落は 1～4 区に分かれていることはすでに述べたが、郵便局の脇を流れる川を境に西側の大原（オーバリ）と東側の東間（アガンマ）に分かれる。大原が 1～2 区、東間が 3～4 区に相当する。

大原には海岸から 2 本目の道路に沿って共同墓地が並ぶ。「池地青壮年団之建（昭和 55 年 5 月）」と書かれていたから、この時期に集落内にあった墓地がまとめられたのかもしれない。

大原の奥の方に公民館があった。与路島や請阿室の集落と同様、公民館の前には土俵がある。こちらは屋根付きだった。この一角に池地出身の戦死者 37 柱を祀った忠魂碑、先開開拓団遭難碑、弥彦吉翁公德碑が建つ。

請阿室地区と同様、各家の塀はブロック塀に作り替えられていて、サンゴ石の塀は少ない。そして空き家が多い。



比較的開かれた湾を抱え山裾に形成された池地集落（左）、港湾中央部の突堤（右）

### 池地小中学校

池地集落の東側のはずれに瀬戸内町立池地小中学校が置かれている。池地と請阿室の両地区を校区とするので、請阿室地区の小中学生は 3 km ほどの険しい山道を歩いて通学していた。

校門の前に立ち、校舎の写真を撮っていると、先方から先生が近づいてきた。へき地の島であっても近頃は部外者が校庭内に立ち入ることにはうるさいので、見知らぬ人を警戒する先生が何気なく私の素性を確かめにきたようだ。

この先生はこの小中学校の教頭だった。道路と学校の境にはデイゴの並木があり、その木陰で少し話を聞いた。教頭は「民宿とやま」の裏手の宿舎に住んでいるとのことなので、こちらまで恐らく車で通っているのだろう。現在の在校生は小学生 5 人、中学生 1 人で、先生は 7 人である。このうち内地留学生は 3 人とのことだ。与路島と同様、島外からの留学生を受け入れ、小中学校の維持を図っている。

実は請島では小中学生がいなくなり、2014（平成 22）年度から休校になっていた。ところが 2017（平成 25）年度に入って請島出身の 2 世帯が子供の入学を機に奄美大島側から島に戻ることを決めたことから、3 年ぶりに小学校が再開されたのである。しかしこの 2 世帯



の子供たちが卒業すると新たな子育て層に移り住まない限り、再び休校になりかねない。そこで内地留学の受け入れを始めたのであった。

瀬戸内町では町内の小規模校に全国から児童生徒を受け入れられるよう、「にほんの里加計呂麻留学」制度を実施している。同制度では、瀬戸内町外の小学1年生から中学3年生までの児童生徒が親と一緒に請島をはじめとする町内に移住した場合、子ども1人につき月額30,000円が助成され、住宅入居後1年間は、家賃の2分の1（上限11,000円）も助成される。内地留学生の3人はこの制度で島にやっていた世帯の子供たちであった。

校舎の裏手には子供たちがオクラなどを栽培する菜園があり、近くにバナナがたわわに実を付けていた。またドラゴンフルーツを栽培する比較的大きな農園もあり、イノシシによる被害を防止するためネットで囲われていた。何でも請阿室の人がここで栽培しているのだという。



池地小中学校の校舎（左）、小中学校の菜園（右）

### ウケシママルバクワガタとウケユリ

集落の背後から島の西側にある大山（標高398m）に登る道がある。車の往来が可能だから山の頂上付近まで登ろうと思った。

ところが山道の入り口にさしかかったあたりに、「ここから先は入山申請が必要です」と書かれた看板が現れ、隣にウケジママグバクワガタは捕獲や譲り渡し「種の保存法」で禁止されていますと書かれた看板も並ぶ。入山するためには「池地集落みのり会」の同行が必要で、しかも2週間前に届け出なければならないと書かれていた。看板を無視するわけにもいかず、入山は断念して引き返した。

請島には絶滅危惧種 I A 類のウケユリや国内希少野生動植物種に指定されたウケジママルバネクワガタ（絶滅危惧 I B 類）が自生・生息している。ウケジママルバネクワガタはアマミマルバネクワガタの亜種とされ、「種の保存法」により、譲渡や採集の禁止が条例により定められているものの、いまだ盗掘や密猟が見られるという。

ウケユリは請島と大島南部の一部のみに分布するユリで、5月下旬から6月中旬に開花する。ウケジママグバネクワガタは請島の原生林の一部のみに生息する固有種で、8月下旬から9月中旬に出現する。この2つの生物はいわば請島の宝といえる。

このため瀬戸内町では2006（平成18）年から、大山への入山に関しては、入山申請と住民の同行を求めているわけだ。



請島の宝の看板（左）、入山規制の看板（右）

### 池田畜産

池地の集落から請阿室に戻る。途中、美しいクンマ海岸を眺め、ヘリポート展望台に寄る。続いて午前中に行けなかった池田畜産の牛舎を車で見に行った。ちょうど息子さんがトラックで飼料を運んできたところで、デリックによって飼料を車から降ろす作業が行われた。しばらくして池田さんが現れたので、早速、話を聞く。ちなみに請阿室で一番若いのがこの息子さんになる。

請島の牛飼い農家は西田タカヒロさんと池田畜産の2戸だけである。与路島と同様、サトウキビ栽培はもう40年ほど前にやめており、現在、島に残っている農業は、肉牛の繁殖と養豚だけになった。西田さんの飼養頭数は2頭とわずかだが、池田畜産は34頭を飼養する中規模農家である。

池田畜産の牛舎は農地の一番奥まった山裾に置かれている。背後には砂防堰堤がつけられているような場所で、人家からは遠く離れているから牛の臭気は集落までは及ばない。

池田さんは1945（昭和20）年生まれの77歳である。私より2学年上だ。1977（昭和52）年ごろから子牛の繁殖を始めたというからすでに半世紀近くになる。子息も後を継いでいるので父子経営になる。毎年30頭ほどの子牛を出荷しているそうだ。子牛の競り市場は奄美大島の笠利町にあるので、古仁屋まで船に積んで運び、その後車で運ぶ。



池田畜産の牛舎（左）、牧草地と牧草ロール（右）

池田さんのところでは牛は放牧せずに牛舎で飼っている。餌は自前の牧草と輸入した濃厚飼料だ。子牛には濃厚飼料を1日6kgほど食べさせるという（親は2kgほど）。

池田さんは畑で牧草を育て、乾燥した草をロール状に巻いて保存しているが、このロールは普段見かけるものに較べると2回りほど小さい。ロールベアラーという機械を使って円柱状に巻くのだが、池田さんが現在所有しているロールベアラーは小型のものようだ。したがって作業効率が悪いため、来年度は町の補助を受け、通常のロールベアラーを導入するらしい。

池田さんからカラスは頭がいいと聞かされた。牧草を刈ったあとにハブが出てくるそうだが、生きたハブを襲うことはなく、機械で挽かれたハブは食べるそうだ。

## 民宿・とやま

池田畜産の牛舎を訪ねてから、「民宿とやま」に戻り、シャワーを浴び、汗でびしょぬれになったTシャツを洗濯する。異様に疲れたため、クーラーを効かせて、17時～19時まで部屋で休憩した。

請島には、請阿室に「民宿とやま」、池地に「民宿みなみ」の2つの民宿がある。渡山さんが経営する「民宿とやま」は、民宿業の他に食料品や雑貨を扱う商店を営む。ご主人（60歳）は10年前まで海上タクシーを営んでいたが、島で2番目に若いことから島内で発生する様々な仕事を請け負っている。その一つが町営船「せとなみ」への対応である。

民宿は30年ほど前から始めた。数年前に台風によって屋根が飛ばされたため、民宿の一部は新しく建て替えられている。

ご主人は母親が与論島の茶花の出身だったことから、与論島で育ち、1980（昭和55）年に島を出て、その後、渡山家に婿養子として入った。

請阿室には漁師がいないから、民宿の食事に水産物は期待できないと思い込んでいたが、あに反して水産物は豊富であった。昼食の素麺チャンプルにはトコブシとサザエの酢の物が付いた。夕食はアカブダイの酢味噌・キュウリ添え、マガキガイ（現地名：テラダ）のキュウリ酢、アオブダイの唐揚げ、コブジメのピーマン・玉ねぎ炒め、イセエビの汁、茄子・ソーキ・コンブ・蒟蒻・ニンジン・ツワブキ・切り干し大根の煮物であった。缶ビール2本と、宇検村の焼酎・レントを飲む。



民宿とやまの入口（左）、夕食（左上から時計回りにアオブダイの酢味噌、マガキガイの胡瓜和え、アオブダイのフライ、ソーキ煮、コブジメの炒め物）（右）

料理の素材である水産物は全て自分たちで獲ってきたものだった。ブダイ類やコブジメ、イセエビはご主人がイノーに潜って獲ったものであり、貝類は女将さんがイノーを歩いて

採ったものである。ところがご主人は漁協に入っていない。もともと沖縄や奄美では海のもののは地元のものという概念が強く、漁協が力を持つのは復帰後のことであったから、島民は誰でも海にアクセスできた。ただ、最近は古仁屋の漁師の 1/2 ほどを I ターンが占めるようになり、漁業権の問題で彼らから突き上げられるようになってきているという。

令和 4 年 4 月 12 日

### 軽石

女将さんは同じ船で孫に会いに鹿児島島に出かけるため、朝食は 6 時 30 分と早い。納豆、ハムエッグ、鯖焼き、ゴーヤ卵とじの朝食をいただく。ご主人は切符売りの仕事があるため、さらに早い時間から出かけていた。

町営定期船「せとなみ」は請阿室を 7 時 45 分に出発の予定だが、実は 35 分ごろには出発するという。このように早くなったのは、福岡ノ場の海底火山の噴火によって請島にも軽石が今年の 10 月ごろから漂着するようになり、発電用の取水口に軽石が詰まり、船が止まる事態が発生したためだという。

ご主人の話では、最初は大きな軽石がやってきて、次第に小さなものに変化していったという。浜に漂着した軽石は人力で回収、婦人会の 6～7 人も手伝ったようだ。請阿室地区の場合は 500 kg 入りのフレコン袋に 200 袋程度回収。池地の場合も 100 袋以上に及んだという。回収したフレコン袋は本島の最終処分場に移送して処分した。

定期船が発着する突堤の手前に船客待合所があり、ご主人はここで切符を販売していた。

池地からやってきた「せとなみ」はご主人の言う通り、約 10 分早く現れた。1 人が下船し、私と民宿の女将ともう 1 人の 3 人が乗った。古仁屋港まで約 1 時間弱を要し、8 時 30 分に着いた。与路島と池地からの乗船客を含め 10 人ほどが下船した。

ちょっと目についたのが、ガソリンのタンクが 10 個も降ろされたことだ。島には給油施設がないから、車を動かすのも、船を動かすのもこのガソリンタンクが唯一の命綱なのである。



軽石が漂着した請阿室の海岸（左）、島民が使用するガソリンのタンク（右）

### 【文献】

町健次郎（2007）：請島ノート、瀬戸内町立図書館・郷土館紀要第 2 号。37-88.

下野敏見（2013）：第一章請島・与路島を訪ねて、第五部南島の生活と生業。奄美諸島の民俗文化誌。南方新社。鹿児島市。335-387.